

## 核融合工学部会セッション

## 核融合原型炉に向けた研究開発の現状と展望

Status and prospects of R&amp;D for fusion DEMO

## (2) 炉内機器設計に向けた研究開発と課題

(2) R&amp;D of in-vessel component design and its technical issues

\*谷川 博康

量子科学技術研究開発機構

## 1. 概要

代表的な核融合炉内機器として増殖ブランケット、ダイバータ、およびリミターが挙げられる。磁場閉じ込め DT 核融合炉においてはいずれの機器も、強磁場下においてプラズマからの熱輻射、粒子束流入、および核融合中性子照射を受ける複合極限環境下で使用されることになる。よって、その機能および健全性を想定機器寿命の間保証するためには様々な技術課題を解決する必要がある。本発表では、特に増殖ブランケット開発の現状と課題について報告する。

## 2. 増殖ブランケットの研究開発

## 2-1. 研究開発の現状

増殖ブランケットに求められる機能は、中性子遮蔽、燃料（トリチウム：T）増殖、およびエネルギー取り出しの3機能である。日本の増殖ブランケットは、水冷却・セラミック増殖材方式を主案として検討が進められ、トリチウム増殖比（TBR）を1.05以上保証することはDT核融合炉においては必須の要求であることから、熱輸送とTBRを成立させることを第一義に設計検討がすすめられてきた。さらに内圧・熱応力負荷に耐え、且つ事故時の耐圧性を有する構造として円筒型およびハニカムリブ管体型の2案が検討されている。これらの設計の基盤技術として、構造材料（低放射化フェライト鋼）、機能材料（ $\text{Be}_{12}\text{V}$ 、 $\text{LiTiO}_3$  /  $\text{Li}_2\text{ZrO}_3$ ペブル）の開発・評価がすすんでいる。

## 2-2. 原型炉にむけた技術課題

原型炉にむけた増殖ブランケット開発における最大の課題は、未体験の極限環境下における圧力容器の構造健全性とTBR確保を両立させなければならない点にある。すなわち、不確定要素が多い場合に耐熱耐圧性能を確保するには厚肉構造にすることで構造強度を大きめにとることが解になりえるが、TBR確保にはブランケット構造は合理的な範囲で限りなく薄肉構造にすることが要求される。一方、プラズマ対向面側（第一壁側）は核融合中性子の重照射を受けることから、構造材の機械特性劣化が不可避である。加えて、構造材の照射後特性は、はじき出し損傷による特性劣化に加えて核融合中性子照射特有の効果（核変換生成  $\text{He}$ 、 $\text{H}$ の影響）が顕著になる条件があると予想されているが、その定量的評価は核融合中性子源による照射実験をまたなければならない。このような制限の下、最大10Tの強磁場下で強磁性体であるフェライト鋼を構造材として使うがゆえに発生するマックスウェル力、ディスラプション時に発生するローレンツ力も考慮した上で一定の寿命の間構造健全性を確保できることを、炉内に1000機強配置されるブランケットモジュールに対して保証することが出来て、初めて稼働率の見通しを得ることができる。

この増殖ブランケットの実環境試験としてITER Test Blanket Module (TBM) 試験が行われる計画であるが、原型炉環境と比べると照射量も小さく、電磁力も相対的に弱い位置で試験されるため、原型炉条件での構造健全性に確認を得るには依然として不確実性が残る。

これらの多くの不確実性を考慮するには、決定論的設計法によるアプローチでは限界があることから、確率論的アプローチが不可欠であると考えられる。

(以上、2020春予稿からの転載)

\*Hiroyasu Tanigawa

National Institutes for Quantum and Radiological Science and Technology